

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIII, 2019

国際仏教学大学院大学研究紀要
第23号（平成31年）

智顓撰 『維摩經文疏』 訳注（七）

藤
井
教
公

智顓撰『維摩經文疏』訳注（七）

藤井教公

はじめに

筆者は智顓撰『維摩經文疏』の訳注を、順次、本誌『国際仏教学大学院大学研究紀要』第十七号（平成二十五年三月刊）と第十八号（同二十六年三月刊）、第十九号（同二十七年三月刊）、第二十号（同二十八年三月刊）、第二十一号（同二十九年三月刊）、第二十二号（同三十年三月刊）に、それぞれ智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）、同（二）、同（三）、同（四）、同（五）、同（六）として発表した。

本稿は、先に刊行した訳注（一）から（六）に続くものである。体裁は前稿を踏襲して、『新纂大日本統感経』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、次にその部分の訳注を付した。本稿は四八〇頁上段一三行から四八二頁上段最終行までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。凡例は次の通りである。テキストの解題は智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）を参照されたい。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏経』卷十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏経』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩経』の经文部分である。
- 一、テキスト文中の()内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰経疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

本文

【テキスト】 480a13-15

若約二法門爲歎者。大智則是歎解。本行即是歎行。若但解而無行。如無足有目不能到清涼池。若但行而無解。

如有足無目不能到清涼池。若解行具足。如目足備即到清涼池。故須解行雙歎也。所以歎解云大智者。解只是觀解。若從假入空觀解。即是一切智。若從空入假觀解。即是道種智。此之智解皆是方便。不名爲大。若第三中道觀解。即是一切種智。名爲大智。故大智論云。我今如力。欲演說大智彼岸實相義。當知大智即是觀諸法實相慧之觀解也。所言本行即是歎行者。從大智之本。能一心具足萬行諸波羅蜜。故大品經云。諸法雖空。而能一心具足萬行。是以「[406]」金光明經云。一切種智而爲根本。無量功德之所莊嚴。滅除諸苦。與無量樂。當知自行雖有種種法門。但略歎解行。橫豎諸德罄無不收。

問曰。菩薩未證極果。何得言皆悉成就。

答曰。菩薩果雖未滿。修因已圓故云皆悉成就也。

【書さ下し】

若し二法門に約して歎を爲さば、大智は則ち是れ解を歎ず。本行は即ち是れ行を歎ず。若し但だ解のみにして行無くば、足無くて目有るは、清涼池へ到ること能わざるが如し。^②若し但だ行のみにして解無くば、足有りて目無きは、清涼池へ到ること能わざるが如し。若し解行具足すれば、目と足と備わりて、即ち能く清涼池へ到るが如し。故に解行雙歎を須いるなり。解を歎じて大智と云う所以は、解は只だ是れ觀の解なればなり。若し從假入空觀の解ならば、即ち是れ一切智なり。若し從空入假觀の解ならば、即ち是れ道種智なり。此の智解は皆な是れ方便にして、名づけて大と爲さず。若し第三の中道の觀の解ならば、即ち是れ一切種智にして名づけて大智と爲す。故に『大智論』に云く、^④「我、今力の如く大智の彼岸、實相の義を演說せんと欲す」と。當に知るべし。大智は即ち是れ諸法實相の慧を觀するの觀解なりと。言う所の「本行」は、即ち是れ行を歎ずるとは、「大智の本」よりは、能く一心に萬行・諸波羅蜜を具足す。故に『大品經』に云く、^⑤「諸法は空なりと雖も、而も能く一心に

萬行を具足す」と。是を以つて『金光明經』に云く、「一切種智にしてしかも根本たり。無量の功德の莊嚴する所、諸苦を滅除し、無量の樂を與う」と。當に知るべし、自行に種種の法門有りと雖も、但だ略して解行を歎ずるのみ。横豎に諸徳の罄、收めざることなし。

問うて曰く、菩薩は未だ極果を證せず。何ぞ皆な悉く成就すと言うを得んや。

答えて曰く、菩薩は果、未だ滿ぜずと雖も、修因已に圓なるが故に、皆な悉く成就すと云うなり。

(1) 二法門 「解」(智慧、理解)と「行」(実践、修行)の二つの視点をいう。

(2) 若し但だ解のみ……清涼池へ到ること能わざるが如し『法華玄義』に「智目行足到清涼池」とある(『大正藏』卷三十三、715b18)。

(3) 若し從假入空觀……一切種智にして 空觀、假觀、中道觀の三觀を、一切智、道種智、一切種智の三智と組み合わせることは、智顓の『修習止觀坐禪法要』に以下のように、「若行者如是修止觀時。能了知一切諸法皆由心生。因緣虛假不實故空。以知空故。即不得一切諸法名字相。則體眞止也。爾時上不見佛果可求。下不見衆生可度。是名從假入空觀。亦名二諦觀。亦名慧眼。亦名一切智。……若能成就無礙辯才。則能利益六道衆生。是名方便隨緣止。乃是從空入假觀。亦名平等觀。亦名法眼。亦名道種智。……深尋此偈意。非惟具足分別中觀之相。亦是兼明前二種方便觀門旨趣。當知中道正觀則是佛眼。一切種智。若住此觀則定慧力等了了見佛性。」(『大正藏』卷四十六、472b15~472c24、傍線筆者、以下同)とあり、從假入空觀を三眼のうちの慧眼に、三智のうちの一切智に配当し、從空入假觀を法眼、道種智に、中道正觀を仏眼、一切種智にそれぞれ配当している。

(4) 『大智度論』に云く『大智度論』卷一に「我今如力欲演說 大智彼岸實相義」(『大正藏』卷二十五、57c21)とある。

(5) 『大品經』に云く 取意による引用か。『摩訶般若波羅蜜經』卷第二十三、一念品の品名「一念」は聖語藏本では「一

心具万行」とある。また同経に「須菩提白佛言。世尊。云何菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時。一念中具足六波羅蜜。四禪四無量心四無色定。四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分。三解脱門。佛十力四無所畏四無礙智。十八不共法大慈大悲。三十二相八十隨形好。」(『大正藏』卷八、386c36~387a2)や「須菩提白佛言。世尊。云何菩薩摩訶薩不遠離般若波羅蜜。一念中具足行六波羅蜜乃至八十隨形好。佛言。菩薩行般若波羅蜜時。所有布施不遠離般若波羅蜜以不二相。持戒時亦不二相。修忍辱勤精進入禪定亦不二相。乃至八十隨形好亦不二相。」(同前、387a7~12)などあり、それらの取意か。

(6) 『金光明經』に云く『合部金光明經』に「一切種智 而爲根本 無量功德 之所莊嚴 滅除諸苦 與無量樂」(『大正藏』卷十六、359c26~27)とある。

(7) 諸徳の罄「罄」は仏具としての打ち鳴らし、及びその音のこと。ここでは解行を讚歎する中に、縦横に多くの徳性が網羅されていることをいう。

【テキスト】 480b5-c2

但四教明解行成就。其義不同。若三藏教。從初僧祇來。緣生滅四諦生解。發四弘誓願。名大智。慈行六度。名本行。至三阿僧祇劫。四諦大解。六度本行雖滿。未名成就。種相好成。即是皆悉成就。若明通教菩薩。從初發心。緣無生四諦。起四弘誓。名大智。行檀波羅蜜。觀三事皆空。乃至於一切法等。名般若波羅蜜。名本行。至八地以上。解行雖均。猶未成就。十地當知如佛。乃是皆悉成就。若別教從初發心。緣無量四諦生解。名大智。學無量六波羅蜜。名本行。入十住名解位。十行名行位。十迴向名解行終心。初地以上。雖解行雙遊。未名成就。十地等覺乃名皆悉成就。若圓教。從初發心。緣無作四諦。發菩提心名大智。一心具萬行一切行。名本行。初住以上。解行一心自然流入。乃至十住十行十迴向九地皆未名成就。居十地等覺。邊察智滿。衆事究竟。即是大智本行皆悉成就

也。若觀心解。約三觀明。初觀因緣生滅四諦。入衆生空。生悲弘誓。名大智。用觀行六度。即是三藏教析假入空觀。名大智本行。約體假入空。名通教大智本行。從空入假觀明別教大「480c」智本行。一心中道正觀。明圓教大智本行。細尋可知。

【書き下し】

但だ四教に解行の成就を明かすのみ。其の義不同なり。若し三藏教ならば、初僧祇①従り來たこのか、生滅の四諦を緣じて解を生じ、四弘誓願③を發するを大智と名づく。慈もて六度を行ずるを本行と名づく。三阿僧祇②に至つて、四諦の大解、六度の本行滿ずると雖も、未だ成就と名づけず。相好を種えて成ずれば④、即ち是れ皆な悉く成就す。若し通教の菩薩を明かさば、初發心従り無生の四諦を緣じ、四弘誓を起こすを大智と名づく。檀波羅蜜を行じ、三事皆空と觀じ、乃至一切法において等しきを般若波羅蜜と名づけ、本行と名づく。八地以上に至つて、解行均しきと雖も猶お未だ成就せず。十地は、まさに知るべし、佛の如くなるを。乃ち是れ皆な悉く成就す。

若し別教ならば初發心従り、無量の四諦を緣じて解を生ずるを大智と名づく。無量の六波羅蜜を學するを本行と名づく。十住に入るを解位と名づけ、十行を行位と名づけ、十迴向を解行の終心と名づく。初地以上、解行雙遊すと雖も未だ成就と名づけず。十地等覺は乃ち皆な悉く成就すと名づく。

若し圓教ならば初發心より無作の四諦を緣じ、菩提心を發するを大智と名づく。一心に萬行・一切行を具するを本行と名づく。初住以上は、解行一心に自然に流入す。乃至十住・十行・十迴向・九地、皆な未だ成就と名づけず。十地・等覺に居し、邊察智滿⑤じ、衆事究竟するは即ち是れ大智の本行、皆な悉く成就するなり。

若し觀心もて解さば、三觀に約して明かす。初めに因緣生滅の四諦を觀じて衆生空に入り、悲の弘誓を生ずるを大智と名づく。觀を用いて六度を行ずるは、即ち是れ本行なり。此れは是れ、三藏教の析假入空觀を大智の本

行と名づく。體假入空に約するを通教の大智本行と名づく。從空入假觀に別教の大智本行を明かす。一心中道正觀に圓教の大智本行を明かす。細尋して知るべし。

- (1) 初僧祇 菩薩が成道するのに必要な修行期間である三阿僧祇劫と百劫のうちの、最初の阿僧祇劫のことをいう。
- (2) 生滅の四諦 天台では藏通別円の四教それぞれにおける四諦を説くが、そのうちの三藏教で説かれる四諦を生滅の四諦という。一切諸法は因縁によつて生滅するという原理のもとに説かれる四諦をいう。四種の四諦については、『法華玄義』卷二下に、「四種四諦者。一生滅。二無生滅。三無量。四無作。其義出涅槃聖行品。約偏圓事理分四種之殊。所言生滅者。迷眞重故從事受名。」(『大正藏』卷三十三、700c28-701a)とある。

- (3) 四弘誓願 初發心の菩薩が四諦を觀じて起こす四種の誓願のこと。一、「衆生無辺誓願度」苦諦を対象とし、数限りない衆生を苦から救済しようとする誓願。二、「煩惱無數誓願斷」集諦を対象に、苦の原因である煩惱を斷尽せしめんとする誓願。三、「法門無尽誓願學」道諦を対象に、苦を滅するための三十七道品等を學ばせんとする誓願。四、「仏道無上誓願成」滅諦を対象に、涅槃を得せしめんとする誓願。

- (4) 相好を種えて成ずれば 三藏教における菩薩は四弘誓願を發した後、三阿僧祇劫の長時において六波羅蜜の修行を行い、次に百劫に亘つて三十二相を獲得するための業を種える百福の修行を行う。この修行が完成して仏果を得る。

- (5) 無生の四諦 四種の四諦のうちの通教における四諦。一切諸法は因縁所生であるから空であり、生ずることも滅することもないという原理の上に説かれる四諦をいう。

- (6) 三事 檀波羅蜜(布施波羅蜜)の修行実践における、施者、受者、財物の三者のこと。『大智度論』に「因衆生空入法空中。行檀波羅蜜。不見三事施者受者財物。能如是者。是名乘於大乘。餘波羅蜜亦如是。」(『大正藏』卷二十五、389c23-25) ㄣㄆㄨㄛˊ。

- (7) 無量の四諦 四種の四諦のうちの別教における四諦。四諦の各諦に無量の相があるとする立場から説いた四諦。
(8) 無作の四諦 四種の四諦のうちの円教における四諦。一切諸法は中道の理法に本具されるものであり、無作であるとする立場から説かれた四諦。

(9) 邊察智 等覺の菩薩の智慧。辺際智のこと。

(10) 體假入空 体空觀によつて空に入ること。大乘通教の空觀をいう。

【トキスト】 480C3-24

[480c3] 諸佛威神之所建立。

此二釋歎。亦得傍成化他也。此句正明加義^①。金剛般若論云。於菩薩身。諸佛與功德智慧力。故名加也。今正明菩薩解行之因。所以得圓。正由諸佛威神之所建立。建立者佛與菩薩智慧加解。大智得成。佛與菩薩功德加行。本行得成也。內因雖是菩薩自能修習。外緣必假諸佛神力與智慧功德冥加。譬如種子內有四大。雖有能生之因。若外無地土日光風雨之緣。豈得生長成實。菩薩亦爾。雖有慈悲智慧精進禪定自行化佗之因。若不假諸佛慈悲地智慧神通風說法雨。自行化佗之因豈得圓也。又如大鵬影覆子得出卵生長。故華嚴經明。八地欲沈空。諸佛加獎勸方得發起。

若約觀心。行人修三觀時。必須懺悔請十方佛。若心至者佛即加護。自然行成。世有邪見坐禪觀行之人。但說自心佛者。何得諸大菩薩皆爲諸佛威神之所加也。此即是釋前也。傍成後化佗者。若加於化佗。華嚴經法慧菩薩說十住。諸佛放光加方得說也。乃至金剛藏菩薩說十地。亦如是成後爲護法城也。

若約觀心。三觀既成。若欲慈心利物。必須懺悔請十方佛威神建立。若至有感即蒙加護。弘法如風靡草也。

(1) テキスト欄外注記に「加上略疏有佛字」とある。『略疏』には「諸佛威神二句二釋歎也。亦傍得成化他。此正名佛加」
【『大正藏』卷三十八、574A14-15】とあるが、今はテキスト通りとする。

(2) テキスト欄外注記に「本下疑脱行字」とある。また『略疏』では、「今明解行因圓正由諸佛威神建立。智慧加解大智
得成。功德加行本行得成。」【『大正藏』卷三十八、574A16-18】とある。今、意味上から「行」の字を加えた。

【書き下し】

諸佛威神の建立する所なり。

此の二は歎を釋し、亦た傍らに化他を成ずることを得るなり。此の句は正しく加の義を明かす。『金剛般若論』
に云く、⁽¹⁾「菩薩の身に諸佛が功德智慧力を與うるが故に加と名づくるなり。」と。今、正しく菩薩の解行の因が圓
を得る所以は、正しく諸佛の威神の建立する所に由るを明かす。建立とは、佛は菩薩に智慧を與えて解を加え、
大智成ずることを得。佛は菩薩に功德を與えて行を加え、本行成ずることを得るなり。内因は是れ菩薩自ら能く
修習すると雖も、外縁は必ず諸佛の神力と智慧功德の冥加を假る。譬えは種子の内に四大有るが如し。能生の因
有りと雖ども、若し外に地土・日光・風雨の縁無かりせば、豈に生長して實を成ずることを得んや。菩薩も亦た
爾り。慈悲・智慧・精進・禪定の自行化佗の因有ると雖も、若し諸佛の慈悲の地、智慧の光、神通の風、説法の
雨を假らざれば、自行化佗の因、豈に圓なることを得んや。

又、大鵬の影⁽²⁾が子を覆い、卵より出でて成長することを得るが如し。故に『華嚴經』に⁽³⁾「八地空に沈まんと欲
するに諸佛、獎勵を加えて方に發起するを得」と明かす。

若し觀心に約さば、行人、三觀を修する時、必ず須らく懺悔して十方の佛に請うべし。若し心至らば、佛即ち
加護して自然に行成ず。世に邪見の坐禪觀行の人、但だ自心佛のみを説く者⁽⁴⁾有り。何ぞ諸大菩薩は皆な諸佛威神

の加する所たることを得んや。此れ即ち是れ前を釋するなり。傍らに後の化佗を成ずとは、若し化佗に加すれば、『華嚴經』の法慧菩薩は十住を説き、諸佛は放光して加して方に説くを得るなり。乃至金剛藏菩薩は十地を説き、亦た是くの如く成ずる後に護法の城と爲すなり。⁽⁵⁾

若し觀心に約さば、三觀既に成ず。若し慈心もて物を利さんと欲せば、必ず須らく懺悔して十方の佛の威神建立を請うべし。若し至つて感有れば、即ち加護を蒙り、弘法は風が草を靡かすが如きならん。⁽⁷⁾

(1) 『金剛般若論』に云く 世親造・菩提流支譯『金剛般若波羅蜜經論』に、「云何加彼身同行。謂於菩薩身中與智慧力。令成就佛法故。」(『大正藏』卷二十五、781b28-9) とある。

(2) 大鵬 『莊子』逍遙遊篇の冒頭にみえる想像上の巨大な鳥。北冥の海に棲む鯢という名の巨魚が化成したものである。

(3) 『華嚴經』に 『華嚴經』六十卷本、卷二十六の十地品に「佛子。是菩薩隨順是地。以本願力故。又諸佛爲現其身。住在諸地法流水中。與如來智慧爲作因緣。諸佛皆作是言。善哉善哉。善男子。汝得是第一忍。順一切佛法。善男子。我有十力。四無所畏。十八不共法。汝今未得爲得。是故勤加精進。亦莫捨此忍門。善男子。汝雖得此第一甚深寂滅解脫。一切凡夫離寂滅法。常爲煩惱覺觀所害。汝當愍此一切衆生。又善男子。汝應念本所願。欲利益衆生。欲得不可思議智慧門。又善男子。一切法性。一切法相。有佛無佛。常住不異。一切如來不以得此法故說名爲佛。聲聞辟支佛亦得此寂滅無分別法。」(『大正藏』卷九、564c2-14) などとある文の取意か。

(4) 但だ自心佛のみを説く者 自心仏とは、それぞれが本來的に有する心性を仏とし、その自心の仏を拝むことを説いた者、の意。具体的人物については未検。

(5) 『華嚴經』の法慧菩薩は十住を説き、『華嚴經』六十卷本、卷八、菩薩十住品に「爾時法慧菩薩承佛神力。入菩薩無量方便三昧正受。入三昧已。(中略)爾時佛神力故。十方各過萬佛世界塵數刹外。有十佛刹微塵數等諸大菩薩。充滿十方。

來詣此土。説如是言。善哉善哉。佛子。善説是法。我等諸人同名法慧。所從來國同名法雲。彼諸如來同號妙法。我等佛所亦説十住。大衆眷屬名味句身等無有異。是故佛子。我等承佛神力。來詣此土。爲汝作證。如此四天下須彌山頂妙勝殿上説十住法。十佛世界微塵數等諸大菩薩來此作證。一切十方亦復如是。」(『大正藏』卷九、444c7-446c10)とある部分の取意か。

(6) 金剛藏菩薩は十地を説き、『華嚴經』六十卷本、卷二十三、十地品に「爾時十方諸佛。皆申右手。摩金剛藏菩薩頂。金剛藏菩薩即從三昧起。告諸菩薩言。諸佛子。是諸菩薩願決定。無有過。不可壞。廣大如法界。究竟如虛空。遍覆一切十方諸佛世界衆生。爲救度一切世間。爲一切諸佛神力所護。何以故。諸菩薩摩訶薩。入過去諸佛智地。亦入未來現在諸佛智地。何等是諸菩薩摩訶薩智地。菩薩摩訶薩智地有十。過去未來現在諸佛已説今説當説。爲是地故。我如是説。何等爲十。一曰歡喜。二曰離垢。三曰明。四曰焰。五曰難勝。六曰現前。七曰遠行。八曰不動。九曰善慧。十曰法雲。是十地者。三世諸佛已説今説當説。」(『大正藏』卷九、542c18-543a)とある。

(7) 若し至つて感有れば「感」は「心」の対語。もと『易経』の「感」(「感」に同じ)の卦に基づく。感心、交感の意で、中国仏教では衆生と仏菩薩との間の感応関係について用いる。ここでは救済を求める衆生の思いが仏菩薩に通じるならば、の意。

【テキスト】 481a1-18

[481a01] 爲護法城受持正法。

[481a02] 一略歎化佗德。此文有二別。一歎化佗心。二正歎化佗功成。三釋歎。一歎化佗心者。爲護法城者。佛法即是法城。以能爲行人防非擬敵故名爲城。若護佛法即是爲護法城也。又解。衆生五陰十二入十八界名之爲法。

此法即空即空王之理名涅槃城。衆生即是法王種性。具足恒沙佛法之理。如城中人物。故此經云。一切衆生即大涅槃。

即菩提相也。但此妙理外爲天魔外道欲壞。内爲界内界外通別見思諸煩惱賊之所侵燒。菩薩爲護衆生本有涅槃之城也。受持正法者。即是四教所明四種之正法也。菩薩從十方佛聞此教法。得陀羅尼總持無忘。名爲受持正法。將用此法降伏天魔制諸外道。及破一切衆生界内界外愛見諸煩惱賊。護涅槃城令一切衆生法王種性皆得安存。恒沙佛法不致失。故名爲護法城受持正法也。

若約觀心三觀明者。假空空假即是護化城涅槃。假中中假即是護大涅槃城也。

【書の下し】

[481a01] 法城を護らんが爲に正法を受持す。

二に略して化佗の徳を歎ず。此の文に三の別有り。一には化佗の心を歎ず。二には正しく化佗の功成るを歎ず。三には歎を釋す。

一に化佗の心を歎ずとは、法城を護らんが爲にとは、佛法即ち是れ法城なり。能く行人の爲に非を防ぎ、敵に擬するを以ての故に、名づけて城と爲す。若し佛法を護らば即ち是れ法城を護ると爲すなり。又解す。衆生、五陰十二入十八界、これを名づけて法と爲す。此の法は即空にして、即空の理を涅槃の城と名づく。衆生は即ち是れ法王の種性^①にして、恒沙の佛法の理を具足す。城中の人物の如し。故に此の經に云く、^②「一切衆生は即ち大涅槃、即ち菩提の相なり」と。但し、此の妙理は外には天魔外道の爲に壞されんと欲し、内には界内・界外の通別の見思の諸煩惱の賊の爲にこれの侵燒する所なり。菩薩は爲に衆生本有の涅槃の城を護るなり。

受持正法とは、即ち是れ四教の明かす所の四種の正法なり。菩薩は十方の佛より此の教法を聞き、陀羅尼を得て總持して忘ること無きを名づけて受持正法と爲す。將に此の法を用いて天魔を降伏し、諸の外道を制し、及び一切衆生の界内界外の愛見^④、諸煩惱の賊を破つて、涅槃の城を護り、一切衆生をして法王の種性を皆な得て、

安んじて存せしめ、恒沙の佛法、失うに致らざらしむるが故に、法城を護りて正法を受持すと名づくるなり。
若し觀心に約さば、三觀もて明かすとは、假空・空假、即ち是れ化城の涅槃を護り、假中・中假は即ち是れ大涅槃の城を護るなり。⁵⁾

(1) 法王の種性 法王は仏のこと。種性は系譜、血統、血族の意味。Sohāの訳語で種姓とも表記する。衆生は成仏の可能性としての仏性を有しているので、数え切れないほどの仏法の理を備えている、の意。

(2) 此の經に云く『維摩經』弟子品に「一切衆生亦應受記。所以者何。夫如者不二不異。若彌勒得阿耨多羅三藐三菩提者。一切衆生皆亦應得。所以者何。一切衆生即菩提相。若彌勒得滅度者。一切衆生亦應滅度。所以者何。諸佛知一切衆生畢竟寂滅即涅槃相不復更滅。」(『大正藏』卷十四、529b14-19)とある部分の取意。

(3) 界内・界外の通別の見思の諸煩惱 三界の内外における通教、別教二教の見惑と思惑。

(4) 愛見 愛と見との二惑のこと。愛は思惑、見は見惑をいう。

(5) 假空・空假、即ち是れ化城の… 大涅槃の城を護る 假空は從假入空、空假は從空入仮のことで、この二觀は中道を見ないので、藏通の二教の範疇となり、その証果も小涅槃にとどまる。『法華經』の化城喩品に則れば、仮りの蘇息処である。一方、假中・中假は、假と中の相即不二をいい、円教の範疇である。化城喩では宝処に譬える大涅槃に相當する。

【テキスト】 481a19-b6

[481a19] 能師子吼名聞十方。

[481a20] 一正歎化佗功成。大涅槃經云。言佛性者。亦名師子吼三昧。菩薩住此三昧。能師子吼如師子具足十一

事。今明。師子吼者。只是無畏之說。菩薩通達四諦四諦。得四種四無所畏。以神通智慧力。能於四不可說用四悉檀緣緣而說。能降伏天魔制諸〔481b〕外道。決定破衆生界內外見思之惑。存於衆生涅槃佛性恒沙法寶之大城也。若約觀心。三觀①若成。即能所行如所說。說四教心無怯弱。如師子子若滿三年即能吼也。名聞十方者。此亦化佗功成也。化功既著十方蒙益。咸共傳揚聲稱馳遠。如大將破敵在城功名蓋世也。

(1) テキスト欄外注記に「心字略疏無」とあり、意味上から「心」字がないほうが意味が通り易いので、今削除した。

(2) テキスト欄外注記に「在疑誤作存」とあるが、意味上は同じなので、テキスト通りとする。

【書き下し】

能く師子吼して名は十方に聞こゆ。

二に正しく化佗の功成るを歎ず。『大涅槃經』に云く、①「佛性と言うは、亦た師子吼三昧と名づく。」と。菩薩は此の三昧に住して能く師子吼すること師子の十一事②を具足するが如し。今、明かさく、師子吼とは只是れ無畏の說なるのみ。菩薩は四種の四諦③に通達し、四種の四無所畏④を得。神通智慧力を以て能く四不可說⑤に於いて四悉檀を用いて縁に赴いて説き、能く天魔を降伏し、諸の外道を制し、決定して衆生の界内外の見思の惑を破し、衆生の涅槃佛性、恒沙の法寶の大城を存するなり。

若し觀心に約さば、三觀若し成ずれば、即ち能く所行は所説の如し。四教を説いて心に怯弱無きこと、師子の子の、若し三年に滿つれば即ち能く吼するが如きなり。

「名、十方に聞こゆ」とは、此れ亦た化佗の功成るなり。化功既に十方に著われ、益を蒙りて咸く共に傳え、聲を揚ぐれば稱は遠くに馳しること、大將が敵を破し、城に在りて功名世に蓋くすが如きなり。

(1) 『大涅槃經』に云く、南本『涅槃經』に「復次善男子。佛性者即首楞嚴三昧。性如醍醐。即是一切諸佛之母。以首楞嚴三昧力故。而令諸佛常樂我淨。一切衆生悉有首楞嚴三昧。以不修行故不得見。是故不能得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。首楞嚴三昧者有五種名。一者首楞嚴三昧。二者般若波羅蜜。三者金剛三昧。四者師子吼三昧。五者佛性。隨其所作處處得名。」(『大正藏』卷十一、769b1-9)とある。

(2) 師子の十一事 南本『涅槃經』に、「眞師子王晨朝出穴頻申欠呿。四向顧望發聲震吼。爲十一事。何等十一。一爲欲壞實非師子詐作師子故。二爲欲試自身力故。三爲欲令住處淨故。四爲諸子知處所故。五爲群輩無怖心故。六爲眠者得覺悟故。七爲一切放逸諸獸不放逸故。八爲諸獸來依附故。九爲欲調諸香象故。十爲教告諸子息故。十一爲欲莊嚴自眷屬故。一切禽獸聞師子吼。」(『大正藏』卷十一、767a1-9)とある。

(3) 四種の四諦 本稿五頁の註(2)(5)(7)(8)を参照。

(4) 四種の四無所畏 四無所畏は、仏が説法に臨んで何ももの畏れることのない四種の無畏心をいう。正等覺無畏、漏永盡無畏、説障法無畏、説出道無畏の四種心をいう。

(5) 四不可説 大乘『涅槃經』に説く、言表によって表現できない場合を列挙したもの。天台では(1)生生不可説(蔵教の範疇)、(2)不生不可説(通教)、(3)不生不可説(別教)、(4)不生不可説(円教)の四不可説を四教に配当し、また四種の四諦に割り当てる。

南本『涅槃經』に「佛言。善哉善哉。善男子。不生不可説。生生不可説。不生不可説。不生不可説。不生不可説。有因縁故亦可得説。」(『大正藏』卷十一、733c9-12)とあり、六不可説が説かれているが、天台はこのうちの四種を取ったもの。

【テキスト】 481b7-c4

[481b07] 衆人不請友而安之。

[481b08] 三釋歎者。衆人不請。友而安之。此是釋歎化佗之義。衆人不請。此釋化佗之心爲護法城也。菩薩慈悲誓願志度衆生。豈待祈請。但使有緣不請自化。譬如有城。寇賊圍逼。連官大將同朝朋友聞其危急。便應赴援。何待城內衆人來祈請也。

問曰。若菩薩是衆人不請之友者。佛何故待梵王帝釋請轉法輪。

答曰。菩薩不須請。況在佛乎。但是說法之宜。生物愍重。故須待請也。

問曰。菩薩不待請者。凡爲有心必應救不。

答曰。若有緣不請自至。若其無緣。雖復三請終無赴也。友而安之。此釋受持正法也。世人以同志爲友。此諸菩薩善巧能同衆生根緣。共修四種四諦。令四種根性得成三乘道果。故法華經云。我等二人亦共汝作。若開權顯實。皆共同乘佛乘。遊於四方。嬉戲快樂。此即法親之友也。而安之者。未安道諦。令安道諦。即是四種出世善根衆生令安住四種道諦。若開權顯實。皆令安住無上大道。即住大般涅槃。故言友而安之也。

若約觀心。三觀觀心。生滅因緣心・無生滅心・假名心・中道心、此四種心。不請三觀。三觀自來。觀四種心。即不請義觀符成心。令四心住四種道諦。即是友而安之也。

【書き下し】

衆人請わざれども友としてこれを安んず。

三に歎を釋すとは、「衆人請わざれども友としてこれを安んず」此れは是れ化佗を歎ずるの義を釋す。「衆人請わざれども」此れ化佗の心は爲に法城を護るを釋するなり。菩薩は慈悲の誓願の志もて衆生を度す。豈に祈請を

待たんや。但だ縁をして有らしめ、請わざれども自ら化す。譬えば城有り、寇賊圍逼するに、連官大將^①、同朝の朋友、其の危急を聞き、便ち應に赴援すべきが如し。何ぞ城内の衆人來たつて祈請するを待たんや。

問うて曰く、若し菩薩は是れ衆人不請の友ならば、佛は何が故に梵王帝釋の轉法輪を請うを待つや。

答えて曰く、菩薩は請うを須いず。況や佛に在らんや。但だ是れ説法の宜、物の愍重を生ず。故に請うを待つを須うるなり。

問うて曰く、菩薩は請うを待たずとは、凡そ心有るの爲に必ず應に救うべきやいなや。

答えて曰く、若し縁有りて請わざれば自ら至る。若し其れ縁無ければ復た三請さると雖も、終に赴くこと無きなり。

「友としてこれを安んず」此れ受持正法を釋するなり。世人は同志をもつて友と爲す。此の諸菩薩は善巧して能く衆生の根・縁に同じて共に四種の四諦を修し、四種の根性をして三乗の道果を成ずることを得せしむ。故に『法華經』に云く、^③「我等二人、亦た汝と共に作さん」と。若し權を開き實を顯わし、皆な共に同じく佛乘に乗り、四方に遊んで嬉戲快樂せば、此れ即ち、法親の友なり。「而してこれに安んず」とは、未だ道諦に安んぜず。道諦に安んぜしむれば、即ち是れ四種の出世の善根の衆生を四種の道諦^④に安住せしむ。若し開權顯實せば、皆な、無上の大道に安住せしむ。即ち大般涅槃に住す。故に言「友而安之」と言うなり。

若し觀心に約さば、三觀もて心を觀するに、生滅因緣心、無生滅心、假名心、中道心、此の四種の心は三觀を請わず。三觀自ら來る。四種の心を觀ずれば即ち不請の義の觀は成心に符い、四心をして四種の道諦に住せしむ。即ち是れ「友而安之」なり。

(1) 連官大將 時代が下るが、北宋の智圓『維摩經略疏垂裕記』には「連官大將者王制千里之外設方伯。五國爲屬。屬有

長。十國爲連。連有師故曰連官。」(『大正藏』卷三十八、73123-25)とあり、国外に置かれた五国を単位とする軍隊で、十国を一連隊としたその隊長ほどに当たるか。

(2) 三請 三度に亘る懇請のこと。仏に説法などを請うときに三度繰り返して請うこと。

(3) 『法華經』に云く『妙法蓮華經』信解品に「若言欲何所作。便可語之。雇汝除糞。我等二人亦共汝作。時二人即求窮子。」(『大正藏』卷九、1710-12)とある。

(4) 四種の道諦 藏通別円の四教における四種の四諦中の道諦についていう。

【テキスト】 481c5-18

[481c05] 紹隆三寶能使不絶。

[481c06] 此釋正化佗能師子吼名聞十方。菩薩用無畏心説四教。即是紹隆四種三寶也。

若頓教直赴圓機衆生。即入佛慧。初心即成就一體三寶。増進不斷。乃至妙覺湛然常住。此即大乘一體常住三寶興隆不斷。故言使不斷絶也。

若漸教赴機次第明不斷絶者。初明三藏教三寶。赴機接引。此機若謝即用通教三寶接引。此機若謝即用別教三寶接引。此機若謝即用圓教三寶接引。圓教一體三寶不絶如前月喻。菩薩用此四教三寶引接。使一切衆生佛種不斷。

得大涅槃常住三寶。從三藏教説三寶漸興。乃至圓教説三寶轉興隆不斷。皆是菩薩説法之功。所以即是能師子吼化功歸已。得名聞十方也。故言紹隆三寶使不斷絶也。

【書き下し】

三寶を紹隆し、能く絶えざらしむ。

此れ正しく化佗の能く師子吼して名は十方に聞こゆを釋す。菩薩は無畏心を用いて四教を説く。即ち是れ四種の三寶を紹隆するなり。

若し頓教ならば直ちに圓機の衆生に赴き、即ち佛慧に入る。初心は即ち一體三寶⁽¹⁾を成就し、増進して斷ぜず。乃至妙覺は湛然として常住なり。此れ即ち大乘の一體常住の三寶興隆して斷ぜず。故に斷絶せざらしむと言ふなり。

若し漸教ならば、機に赴いて次第に斷絶せざるを明かすとは、初めに三藏教の三寶を明かし、機に赴いて接引し、此の機、もし謝すれば即ち通教の三寶を用いて接引す。此の機、もし謝すれば即ち別教の三寶を用いて接引す。此の機、若し謝すれば即ち圓教の三寶を用いて接引す。圓教の一體三寶の絶えざること前の月喩の如し。菩薩は此の四教の三寶を用いて接引し、一切衆生をして佛種を斷ぜず、大涅槃の常住三寶を得さしむ。三藏教は三寶を説いてより漸に興こる。乃至、圓教は三寶を説いて轉じて興隆し、斷ぜず、皆な是れ菩薩の説法の功なり。所以に即ち是れ能く師子吼して化すの功、歸し已つて、名は十方に聞こゆるを得るなり。故に三寶を紹隆して斷絶せしめずと言ふなり。

(1) 一體三寶 仏・法・僧の三宝が、お互いに相即し、融即して一体となつているという立場からの三宝に対する見方。これに対し、三宝の個々が独立しているという観点からの三宝を梯橙の三宝という。

(2) もし謝すれば 「謝」は前のあり方から変化すること、あるいは時間が経過すること等の意。ここでは前者の意味で用いられている。

【テキスト】 481c18-482a8

若約觀心明紹隆不絕者。若佛在世紹隆三寶。使不斷絕者。佛法正以付囑在家出家二衆弟子。所以優填波斯造像供養。即是相從佛寶令眞佛寶紹隆。使不斷絕也。阿闍世王常供千僧請迦葉結集法藏。令受持讀誦解說書寫。即是相從法寶。爲使眞法寶紹隆不絕也。阿育王造八萬四千塔。度八萬四千人〔482a〕出家。即是相從僧寶。欲使正眞僧寶紹隆使不絕也。若此相從三寶興隆不絕則未來彌勒出世。眞正三寶紹隆不絕。若未來彌勒當入涅槃。佛去世後。形像經書出家弟子還復如今。但行人若能於今末世造諸尊儀。殿堂供養。書寫大乘讚揚講說。度人出家敬心供養一方。乃是相從三寶紹隆。

若住三觀之心。觀此紹隆相從三寶之心。即是四教眞正三寶紹隆不絕也。

（1） テキスト欄外注記に「未下疑脫來字」とあり、また意味上からも「來」の字を補った。

【書き下し】

若し觀心に約して紹隆^①不絶を明かさば、佛在世の若きは三寶を紹隆し斷絶せざらしむれば、佛法正しくもつて在家出家の二衆の弟子に付囑す。所以に優填・波斯は像を造つて供養せり。即ち是の相、佛寶に從い、眞の佛寶を紹隆して斷絶せざらしむるなり。阿闍世王は常に千僧に供え、迦葉に請うて法藏を結集し、受持・讀誦・解説・書寫せしむ。即ち是の相、法寶に從て爲に眞の法寶をして紹隆せしめ、絶えざらしむるなり。阿育王は八萬四千の塔を造り、八萬四千人を度して出家せしむ。即ち、是の相は、僧寶に從つて正眞の僧寶を紹隆し、絶えざらしめんと欲するなり。若し此の相、三寶に從つて興隆し絶えざれば、則ち未來に彌勒出世して眞正の三寶紹隆して絶えざらん。若し未來に彌勒當に涅槃に入らば、佛、世を去つて後、形像、經書、出家の弟子の還復すること

と今の如し。但だ行人、若し能く今の末世において諸尊儀を造りて、殿堂に供養し、大乘を書寫して讚揚し、講説して人を度して出家せしめ、敬心もて供養すること一方なれば、乃ち是の相、三寶に従つて紹隆す。

若し三觀の心に住し、此の紹隆の相は三寶に従うの心を觀ぜば、即ち是れ四教の眞正の三寶紹隆して絶えざるなり。

(1) 紹隆「紹」は受け継ぐ、繼承するの意。「隆」は盛んにする、盛り上げるの意。「紹隆」で、受け継いで盛んにする、という意味になる。

(2) 優填・波斯 優填王と波斯匿王のこと。Indra 優填王は『增一阿含經』卷二十八には、釈尊が母の摩耶夫人に説法するため三十三天に昇つた時、王が仏を拜することができず悲しんで病氣になり、その勅命で牛頭梅檀をもつて五尺の釈迦仏の尊像を刻ませたところ、病氣が平癒したとある。このことから、これが仏教における最初の仏像造立ともいわれる。

『增一阿含經』には、「是時波斯匿王優填王至阿難所。問阿難曰。如來今日竟爲所在。阿難報曰。大王。我亦不知如來所在。是時二王思觀如來遂得苦患爾時群臣至優填王所。白優填王曰。今爲所患。時王報曰。我今以愁憂成患。群臣白王。云何以愁憂成患。其王報曰。由不見如來故也。設我不見如來者便當命終。是時群臣便作是念。當以何方便使優填王不令命終。我等宜作如來形像。是時群臣白王言。我等欲作形像。亦可恭敬承事作禮。時王聞此語已。歡喜踊躍不能自勝。告群臣曰。善哉卿等所說至妙。群臣白王。當以何寶作如來形像。是時王即勅國界之内諸奇巧師匠。而告之曰。我今欲作形像。巧匠對曰。如是大王。是時優填王即以牛頭梅檀。作如來形像高五尺。是時波斯匿王。聞優填王作如來形像高五尺而供養。」(『大正藏』卷二一、706a2-19) とある。

(3) 即ち是の相、佛寶に従い、「即是相從佛寶」の訓みとして、「即ち、是れ相從の佛寶」云云として「相從」を熟語とし、

形容句とする訓み方があり、従来この訓み方がなされてきたようであるが、用例が少ない。今は別な訓み方を取る。以下、同じ。

(4) 阿育王は八萬四千の塔を造り、『雜阿含經』に、「彼國有王。名曰阿育。當王此閻浮提。爲轉輪王。正法治化。又復宣布我舍利。於閻浮提。立八萬四千塔。」(『大正藏』卷二一、164c18-21)とある。

(5) 諸尊儀 「儀」は姿、形の意。多くの仏たちの姿、の意。

【テキスト】 482a8-24

所以者何。若觀紹隆三寶之心。生滅無常。析假入空。自行教他。即是三藏教眞三寶紹隆也。若觀紹隆相從三寶之心。皆如幻化即空。自行教他。即是通教眞實三寶紹隆。使不斷絕也。若觀紹隆相從三寶之心。不滯於空。能入假名。分別無量智慧恒沙佛法。境智無二。自行教他。即是紹隆別教眞實三寶。使不斷絕。若觀紹隆相從三寶之心。入中道第一義諦。正觀分明。自行化他。即是圓教一體三寶。紹隆不絕。是故在家出家菩薩。應須如是紹隆三寶不斷絕。故經云。敬像如眞佛。得福。亦復然。此經云。無離文字說解脫相。文字相離即解脫相。解脫者即諸法也。賢愚經云。未來多有破戒比丘。猶應供養恭敬如舍利弗大目乾連。所得功德亦復無量。紹隆三寶功德最大無過。譬如大臣住持家國功勳重大。菩薩紹隆三寶種。使不斷絕者。功德無量無邊。十方諸佛說不能盡也。

(1) テキストは「實」であるが、意味上から「寶」に改める。

【書き下し】

所以は何ん。若し三寶を紹隆するの心、生滅無常なりと觀じて、假を析して空に入り、自ら行じ他をも教うれ

ば、即ち是れ三藏教の眞の三寶の紹隆なり。若し紹隆の相、三寶に従うの心、皆な幻化の如く即空なりと觀じ、自ら行じ、他をも教うれば、即ち是れ通教の眞實の三寶の紹隆にして斷絶せざらしむるなり。

若し紹隆の相、三寶に従うの心を觀じ、空に滯らず、能く假名に入り、無量の智慧、恒沙佛法を分別して、境智無二にして、自ら行じ他を教うれば、即ち是れ別教の眞實の三寶を紹隆し、斷絶せざらしむ。

若し紹隆の相、三寶に従うの心を觀じ、中道第一義諦に入り、正觀すること分明に、自ら行じ、他をも化さば、即ち是れ圓教の一體三寶、紹隆して絶えず。是の故に在家・出家の菩薩、應に須らく是くの如く三寶を紹隆して斷絶せず。故に經に云く、^①「像を敬うこと眞佛の如くせば、福を得ること亦た復た然り」と。此の經に云く、^②「文字を離れて解脫相を説くこと無し。文字相離るるは、即ち解脫相なり。解脫とは即ち諸法なり」と。『賢愚經』に云く、^③「未來に多く破戒の比丘有り。猶を應に供養恭敬すること舍利弗・大目乾連の如くすべし。得る所の功德、亦た復た無量なり」と。三寶を紹隆する功德は最大にして過なし。譬えば大臣の家國を住持するの功勳重大なるが如し。菩薩、三寶種を紹隆して斷絶せざらしむるは、功德無量無邊なり。十方の諸佛の説くも盡すこと能わざるなり。

(1) 故に經に云く『小品般若經』に「佛實滅度。須菩提。化人實無生無滅。如是須菩提。菩薩行般若波羅蜜。當信知諸法如化。世尊。若佛佛所化人無差別者。云何令布施清淨。如人供養佛是衆生乃至無餘涅槃福德不盡。若供養化佛。是人乃至無餘涅槃福德。亦應不盡耶。佛語須菩提。佛以諸法實相故。與一切衆生天及人作福田。化佛亦以諸法實相故。與一切衆生天及人作福田。」(『大正藏』卷八、371c29-28)とあり、箇所を取意による引用か。

(2) 此の經に云く『維摩經』弟子品に「維摩詰言。一切諸法如幻化相。汝今不應有所懼也。所以者何。一切言說不離是相。至於智者不著文字故無所懼。何以故。文字性離無有文字。是則解脫。解脫相者則諸法也。」(『大正藏』卷十四、

540c16-20)

また、觀衆生品に、「舍利弗。無離文字說解脫也。所以者何。一切諸法是解脫相。」（同前、538a14-16）とある。

- (3) 『賢愚經』に云く、『賢愚經』に「將來末世。法垂欲盡。正使比丘。畜妻俠子。四人以上。名字衆僧。應當敬視如舍利弗目犍連等。」（『大正藏』卷四、434a19-21）とある。

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經 in its form. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains merely a few paragraphs, i.e. from X.18.480a13 to X.18.482a24. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (7)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538-597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561-632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711-782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549-623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the